

2012年 和本で見る書物史

第7回 江戸の書物（商業出版の開始）

はしぐち 橋口 こうのすけ 侯之介

和本入門 pp56-61

近世の初期、ようやく商業出版が開始された

江戸時代の出版の発展の基礎が17世紀初頭にあった。

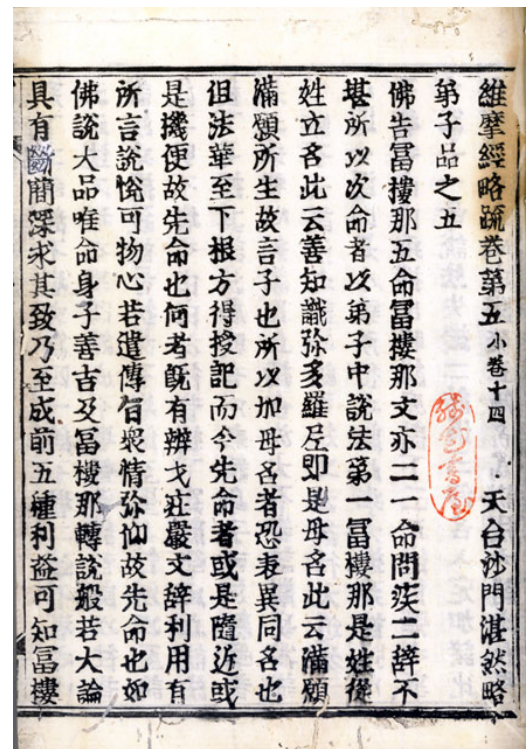
江戸初期古活字版の意義

1590年代朝鮮から伝わった活字の印刷法を導入し、豊臣秀頼・徳川家康をはじめ、寺院などからも多くの活字版がつくられ、17世紀初頭の慶長・元和年間に盛んになった。朝鮮では早くも14世紀には銅活字による印刷が行われ、仏教や儒学などの文献が刊行されていた。グーテンベルクより200年早い。

その源は唐代で陶器をつかった活字印刷が試みられたとことが文献から想定されている。やがて鋳型に一字ずつ文字を彫り、青銅を流す鋳造活字も宋代には考え出されていた。しかし、中国では実物が残存していない。

それが高麗に伝わり、もともと金属を象嵌する技術にたけていたことが高麗に伝わり、もともと金属を象嵌する技術にたけていたことも相まって実用化が進んだのだ。次の李朝もこれをよく受け継ぎ、美しい仕上がりの銅活字印刷が行なわれるようになっていた。

（古活字版『維摩経略疏』比觀山版、元和2年刊=1616）。



キリシタン版

16世紀末からキリスト教を伝えたイエズス会も布教のために出版活動を行い、活字印刷をした。それをキリシタン版という。

ヨーロッパから伝わった印刷機で、キリスト教の入門書や辞書をつくったほか、イソップ物語の翻訳や平家物語などの文学書も刊行した。しかし、秀吉の伴天連追放令など禁教への動きが強くなったことなどから全国に普及することはなかった。

宣教師たちが出版に意義を認めたのは、日本人が文字によって思考する基盤が強かったことを見抜いたからである。このことは、日本人の書物観を探る上で念頭においてよいことである。

→キリシタン版『太平記』の目次部分。活字印刷である(天理図書館蔵)



平仮名の活字印刷

そこでは中世までの仏書や漢籍ばかりでなく、仮名交じり文も出版されるようになった。その代表は慶長13年(1608)の嵯峨本『伊勢物語』で、本阿弥光悦の文字を活字で表現した美しい本である。

漢字は一文字一文字独立しているのので、一行に入る文字数

が固定できる。たとえば上記『維摩経略疏』は 11 行×20 字詰めであり、そうと決めたら、全巻にわたって統一される。

しかし、平仮名はそうはいかない。もともと漢字のくずし字（草書体）から形成された表音文字なので、原則として平仮名交じり文は、漢字も草書体を原則とする。草書体の文字と文字の間もつなげる。これを連綿れんめんといい、それを活字で表現することは至難の技だった。嵯峨本『伊勢物語』ではこれを実現している。

つまり、文字 1 字に一つの活字でなく、仮名でもいくつもの種類の文字種を用意しておかなければならない。それも美しく仕上げるために。

若むとくあわらわをんふのえうま
ありりや年をへそよりひまたりぬを
うさうてぬりえ出ていさうたよ
りりあくた何といふをぬりぬりぬ
冬くそのうへりをまきわらぬぬを
いなたうとなんおさよひぬりぬり
たにぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ともさうてぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり



古活字版の見分け

活字かどうかは、慣れてこないと判断しにくい。そのコツがわかれば見分けられるようになる。

活字の大きさが微妙に不揃いであったり、組んだ文字の方向が曲がったりしてしまうため、刷り面にどうしても文字の濃淡やゆがみなどが出てしまう。

匡郭などの罫線も古活字版では板を差しこんで組むのだが、どうしてもピタリとはまらない。そのため枠の角のところに隙間ができてしまう。そこをみきわめる。

江戸時代の基本形・袋綴

室町時代の後

半から、本の装訂ふくろとじは袋綴となった。以後、江戸時代の書物の 90%はこの形である。

中国では明代から始まっており、線装本

という。これが、シンプルだが丈夫でつくりやすく、安定した製本方法だったからである。



活字はなぜ廃れてしまったのか

嵯峨本『伊勢物語』は人気があったので、異植字版いしょくじばんといってそのたびに活字を組みなおして再版した。このあと慶長 14、15 年にも異植字版を出した後、活字をやめて木版印刷せいばん（整版という）で出版を続けた。再び中世以来の印刷法である一枚の板に彫る木版印刷＝整版で対応することになった。そうすれば増刷がいくらでもできたからだった。

江戸時代では寛永を過ぎると、いったん活字印刷の火は消えてこの整版が中心になってしまう。

たしかに活字は進んだ印刷術だった。しかし、それ以上進歩をとげなかったのはいろいろな理由がある。いったん組に使った活字は、印刷後ばらして次の本のために再利用する方法だったので、再版するには効率がよくなかったのである。また、漢字が多いので、数千字分の文字を用意しておかなければならないし、

仮名なら連綿活字をいくつも用意しておかなければならない。そこがアルファベット 26 文字分で足りたヨーロッパと違う点である。

本屋の登場＝商業出版の始まり

寛永期後半（1630 年代）になると、活字は下火となり、木版を使った従来型の印刷（整版）に戻った。これは技術的に退化したのではなく、新たな道が拓けたと考えるべきである。いったん活字印刷が入ったことで、かえって整版の良さを再認識したのだ。

古活字版が盛んに作られるようになったとき、本づくりのノウハウを維持してきたのは、それまで本を作ってきた寺院だった。一方、町衆が台頭し、そこから商業出版をする者があらわれ、寺院の職人をつかって本を出すようになった。出版をする本屋の誕生である。

活字ではできない印刷法を整版が可能にした。それは、

- これまで書き入れで対応してきた訓点、振り仮名をはじめから刷ることができる。連綿によるかな書き、挿絵も整版だからこそ容易に表現できる。これで読者層を広げる効果があった。
- 板木によって容易に増刷できることが部数増となって収益を確保する道が拓けた。17 世紀後半には、京都だけで 100 軒以上の本屋＝書林ができた。
- なにしろ板木は丈夫。200 年もった板木は数知れない。いま 3, 400 年経ったものでも刷れる。内容が陳腐化しないことも重要。

書物が収益の対象となり、かつ採算がとれるようになったのである。

書下ろしの「現代小説」仮名草子の登場

お伽草子は「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんがいました」と時代・場所・人物を特定しないで相当に昔の架空の話としていた。それが、今、京都に竹齋というやぶ医者がいる、となる。仮名草子の中には、古い物語や怪奇談、笑い話をもじったものや、イソップを翻訳した『伊曾保物語』のような翻訳、中国小説の翻案もあるが、その特徴は、当代を舞台にした書下ろしの小説が多いということである。古典を出すときも、パロディにして「当代風」に話をかえてしまう。『伊勢物語』をもじった仮名草子の『仁勢物語』などは原文を逐条もじった明快なパロディ作品である。

ここが近世の俗文学の底をつねに流れる滑稽さになっている。これも商業的な採算がとれるようになったからである。

たとえば、『竹齋』は、今も腕の悪い医者「ヤブ」というが、その起源となった話である。竹齋は諸国行脚をしながら名所をめぐり、数々のあやしげな診療を繰り広げた。

このあと『竹齋療治之評判』、『竹齋はなし』、『竹齋狂歌物語』などと藪医者・竹齋ものが江戸時代を通じてパロディの対象になる。

パロディが成立するのは、読者の側が元の話をよく知っていなければならない。それがわかってこそおもしろいのである。仮名草子の時代は、それがわかるレベルの読者が、商業出版にたえるほどの数に達し出したということも示している。

参考文献

川瀬一馬『増補古活字版之研究』（昭和 42 年、ABA J 刊）

『江戸時代初期出版年表』（平成 23 年、勉誠出版）

橋口侯之介『和本への招待』（平成 23 年、角川選書）

『仮名草子集成』東京堂出版（昭和 55 年から、全 45 巻）

